
真 S D ガンダム外伝 『一角獣の騎士』

超B・B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真SDガンダム外伝 『一角獣の騎士』

【NZコード】

N3411Q

【作者名】

超B・B

【あらすじ】

スダ・ドアカワールドに新たな脅威が迫る”滅竜魔王Sフリーダムガンダム”

その脅威に挑むは”一角獣の騎士”心獣騎士ヒコガンダムは戦う。この世界の脅威と戦う為、己の使命の為に”白き一角獣”は多くの仲間と協力し強大な悪に立ち向かう。

これは、SDガンダム外伝と別のアニメキャラとの多重クロス作品となっています。

キャラ崩壊も考えていますのでキライな方申し訳ございませんが
戻りください。

プロローグ（前書き）

すみません。

先ほど短編で投稿してしまったので再度投稿です。

プロローグ

ここは、『スダ・ドアカワールド』この世界では、ヨーロン族（人間）と、MS族が共存している。

その世界に存在する一つの国『ラクロア王国』の大地を歩く全身をマントで覆った者が歩いていた。

「・・・・・」

その者が向かう先とはいつたい何処なのか？それは、この世界の神のみが知である。

所変わつて『ラクロア王国』では、この国の王女ラクスは城から夜の星空眺めていた。

ふと、王女ラクスの後ろで誰かが呼ぶ声が聞こえた。

「王女！－ そろそろ就寝のお時間です。」

「あら、^{ローズ}薔薇騎士ジャステイス」

そこには、緑のマントと腰に2本の小振りの剣を持った赤いガンダムが王女の後ろに立っていた。

「王女、夜風は体に良くありません。それに明日は・・・」

「わかつてますわ、明日は大事な儀式ですものね。お休みなさいませ騎士ジャスティス」

「お休みなさいませ、王女ラクス」

そして、”絶望の日”へと向かうべく夜は明けていった。

プロローグ（後書き）

ご意見、感想お待ちしております。

一角獣の騎士 第1章・1（前書き）

全四部で位を目標に構成しています。

ラクロア城の地下で儀式が行われようとしていた。

『神歌の儀』 それは100年に一度、神へ歌を捧げる儀。

100年に一度この世界の神へ歌を捧げる事でその世界の平穏を保たれると言う儀式である。

今までにその儀式が行われようとしていた。

地下の儀式場では、この国の王女であるラクスと数名の兵士が居た。

「これより、『神歌の儀』を始めます」

開始の合図を送ったのはこの国の三大魔法使いの一人である『高町なのは』であった。

そして、『神歌の儀』が開始された。

中央に魔方陣が展開され中には王女ラクスが歌を歌い始めた。

その時、部屋の中に雷が轟き爆発が起きた。

「なんだ一体！？ 何が起きたんだ」

薔薇騎士ジャスティスは、起き上がり直ぐに周りを見たが辺り一面黒煙で何も見えなかつた。

「ふつ、ふつ、ふつ、ふはははははは

だが、その時笑い声が部屋に響き渡つた。

「貴様、何者だ！！」

薔薇騎士ジャスティスを始め周りの兵士は笑い声の方を見た。

笑い声の方には、王女ラクスを抱えたMS族が一人天高く居た。

「私は・・・魔王、魔王^{ストライク}Sフリーダムガンダム、これよつこの世界の”神”だ！！」

そこに居たのは、ガンダムタイプの顔をした黒きマントを羽織6枚の黒翼を生やした者が居た。

時を同じく頃、城の前に全身をマントで覆つた者が立っていた。

「・・・此處に奴がいる」

黒雲と雷鳴轟く大地に一人運命の騎士が降り立つた。

「召喚！」^{コール}

空中にいる魔王^{ストライク}SDFリーダムガンダムは地面に巨大な魔方陣を出現させ”召喚の儀”を行つた。

「出でよ！魔人クシャトリヤ」

魔方陣より現れたのは、両肩に巨大な4枚の殻を持った巨大な緑の魔人が現れた。

「ヴァアー！」

魔人クシャトリヤは咆哮を上げ、その場の襲い掛かってきたのだった。

「くつ、デ、デカイぞコイツ！」

薔薇騎士ジャステイスは襲い掛かってきた魔人クシャトリヤの攻撃を回避した。

「くたばれやー！… どっせええい！…」

魔人クシャトリヤの足元に突撃したのは、今回の『神歌の儀』の護衛にあたつた一人”闘士ジム・ストライカー”だった。闘士ジム・ストライカーは魔人クシャトリヤの足元に自身の武器である”ツイン電磁スピア”を突き刺した。だが、ツイン電磁スピアは足元に刺さつたが魔人クシャトリヤはそれを払い除ける様に巨大な腕を闘士ジム・ストライカーを退けた。

「ぐおおおお」

闘士ジム・ストライカーは吹き飛ばされ壁にめり込んだ。

薔薇騎士ジャステイスは上空を舞い上がり、そのまま魔人クシャトリヤへと突撃した。

「ならば、これでどうだ必殺！… 薔薇彗星切りいい！…」

薔薇騎士ジャステイスは自身が持つ2本の剣”正義の剣”^{ジャステイス・ソード}を振るい魔人クシャトリヤを切りつけた。

魔人クシャトリヤは、その巨体を怯ませたのだった。

「ふふふ、やるではないか。この”世界の騎士”は、だが魔人の真

の力はこんなものではない。」「

空中に浮かび見物をしていた魔王^{ストライク}Sフリーダムガンダムは不適な笑みを浮かべた。巨体を立ち上がらせた魔人クシャトリヤは、4枚の殻を開き中から無数の小さな蟲が出て来た。無数の蟲は薔薇騎士ジヤステイスに襲い掛かり、体のあちこちに纏まり付いた。

「なんだ、この蟲は体から離れない！」

そして、薔薇騎士ジヤステイスの体に張り付いた無数の蟲は爆発したのだった。

「ぐわあああ！…」

「ジャステイス！…」

魔王^{ストライク}Sフリーダムガンダムに捕まっている王女ラクスは薔薇騎士ジヤステイスの名を叫んだ。

その場いた全員は倒れたのだった。

「ははははは、弱い、弱すぎるぞ”この世界”の騎士たちは、この王女は生贊に頂いて行くぞ。」「

魔王^{ストライク}Sフリーダムガンダムが王女ラクスを連れ去るうと魔人クシャトリヤが勝利の雄叫びを上げたその時だった。

「そやは、させないぞ魔王よ！…」

全身マントを羽織った者が魔王と魔人の前に現れたのだった。

「ん？ 貴様は一体何者だ。」

マントを羽織つた者はマントを放り投げ名を掲げた。

「俺は、俺は”騎士UICガンダム”お前に滅ぼされた世界の騎士の生き残りだああ」

騎士UICガンダムは全身を白い鎧を身につけ一角獸を思わせる角の兜をつけ顔は仮面で隠していた。

今此処に、騎士UICガンダムは滅竜魔王ストライクフリーダムガンダムと魔人クシャトリヤに挑んでいった。

一角獣の騎士 第1章・1（後書き）

短いですが、まだまだ続きます。

一角獣の騎士 第1章・2（前書き）

続きです。

ぬく、ゴーリーンの「テストロイモード」が書けているか少し不安ですが暖かく読んでください。

騎士UICガンダムは、右手に持つ剣（一角獣剣）で魔人クシャトリヤに向かっていった。

「はあああ、ていやあああ」

騎士UICガンダムは、飛び上がり魔人クシャトリヤに切りかかった。

動くのが遅い魔人クシャトリヤは斬撃を受けた。

騎士UICガンダムによる怒涛の斬撃ラッシュを繰り返した。

「せい、せい、せいやーー！」

そして、怒涛の斬撃は魔人クシャトリヤはその巨体を地面に倒した。

「どうだー、次はお前だ魔王！ー！」

だが、その様子を見ていた魔王Sフリーダムガンダムは不適な笑みを浮かべていた。

その時、騎士UICガンダムの背後から巨大な腕が伸び襲い掛かってきた。

背後から伸びてきた巨大な腕を回避した騎士UICガンダムは魔人クシャトリヤを見た。

「ウガアアアー！」

魔人クシャトリヤは巨大な4枚の殻から薔薇騎士ジャステイヌ達を倒した無数の蟲を放出した。

無数の蟲は騎士U.C.ガンダムに襲い掛かってきた。

騎士U.C.ガンダムは自身の左手に持つ盾（白き獸の盾）を前に出し無数の蟲の爆発を防いでいた。

「くつ、こままでは、ま、負ける。」

だが、その攻撃に耐えていた騎士U.C.ガンダムのじりじりと後退し始めた。

その時だった、騎士U.C.ガンダムの体は”赤く光”始めた。

「負けて、負けてたまるかあああ！！」

そして、騎士U.C.ガンダムの体は”赤い光”に包まれた。

”赤い光”に包まれた騎士U.C.ガンダムは魔人クシャトリヤに体当たりをし魔人クシャトリヤは再びその巨体を倒した。

「なんだ！？この光は一体何なんだ。」

一部始終を見ていた魔王Sフリーダムガンダムは驚愕した。

”赤い光”は次第に治まり一人の騎士が魔王Sフリーダムガンダムの目の前に居た。

その者は、白き鎧に所々赤い発光を身につけ一角獸を思わせる兜は

2本の金色の角へと変わり、仮面を脱ぎ捨て、ガンダムタイプの顔を出した。

”心獸騎士^{コニコーン}ヒュンターガンダム”だった。

「貴様、一体何者だ！？」

魔王^{ストライク}Sフリーダムガンダムの問いに心獸騎士^{コニコーン}ヒュンターガンダムは答えた。

「言つたはずだ。貴様に滅ぼされた”世界”の生き残りだと
はずだ。」

「魔王を葬り去るまで俺は死なん！？」

心獸騎士^{コニコーン}ヒュンターガンダムの背後では起き上がった魔人クシャトリヤが
腕を振り上げ襲い掛かってきた。

心獸騎士^{コニコーン}ヒュンターガンダムは魔人クシャトリヤの方向を見ると突撃して
いった。

「悪しき者よ、出て行けええええ！」

心獸騎士^{コニコーン}ヒュンターガンダムは盾を放り出し、右手に持っていた剣（一角
獣剣）を両手で持つと剣は一瞬光2刀流へと変わった。

「つおおおお 必殺！！”一角獣流星斬り”

「グ、グギヤーー！」

魔人クシャトリヤは大きく×（バツ）の字に斬られ光の粒子となり消えていった。

そして、心獸騎士^{ユニアーツ}U.C.ガンダムは着地し片方の剣を魔王^{ストライク}Sフリーダムガンダムに向けた。

「次は、貴様だ魔王！..！」

「ふつふふ、今は退却しよう大事な”儀式”があるのでからな。」

魔王^{ストライク}Sフリーダムガンダムは、王女ラクスを抱えながら空間転移の魔方陣の中に消えていった。

「まつ、待て魔王・..」

心獸騎士^{ユニアーツ}U.C.ガンダムは追おうとしたがその場に力尽き倒れ元の白き鎧を身に纏い仮面を付けた騎士に戻った。

こうして、心獸騎士^{ユニアーツ}U.C.ガンダムと滅^{ストライク}童魔魔王^{ストライク}Sフリーダムガンダムの戦いの火蓋は切って落とされたのだった。

一 角獣の騎士 第1章・2（後書き）

感想お待ちしています。

一角獣の騎士 第1章・3（前書き）

今回は、”過去”書いてみました。

騎士^{ヨーハン}ヒカル^ガンダムは魔人クシヤトリヤとの戦いから氣を失い今はラクロア城内の寝室で寝ていた。

そんな、騎士^{ヨーハン}ヒカル^ガンダムは自身の過去の夢を見ていた・・・

ここは、スダ・ドアカワールドとは”別の世界”コインには”表と裏”がある様にスダ・ドアカワールドにも裏の世界が存在する。

そう、スダ・ドアカワールドの”裏の世界”（ニュー）スダ・ドアカワールド”と今は言つておこう。

その世界では、ラクロア城を初め数多くの国が統治していた。

騎士^{ヨーハン}ヒカル^ガンダムがいるラクロア騎士団では、ここ数千年での間に大きな争いは無く平和な時が刻まれていた。

だが、ある一人の人物によりその平和な時は崩れ去つていった。
騎士^{ヨーハン}ヒカル^ガンダムが何故”表の世界であるスダ・ドアカワールド”に来た経緯を語ろう。

”崩壊の日” 数日前の話・・・

ラクロア城（）の王が居る広間では、任命式が行われていた。

「ガンダム族の末裔、騎士（）ガンダムよ、これよりアナタはラクロア騎士団所属へと任命します。」

「御意、有難き幸せの極みです。”王女フェルト”」

任命式が終わり騎士（）ガンダムは晴れてラクロア騎士団所属となつた。

「おめでとう、騎士（）ガンダム心から祝福するよ。」

「おめでとう、騎士（）ガンダム」

「ありがとう、”雷騎士 エリオ””、”鍊金術師 ハミヤ”」

騎士（）ガンダムを祝福するために現れた団長を含めラクロア騎士団の所属の5人のメンバーがこの式典に集まっていた。

そんな平和な時が数日過ぎたある日事態を一変する出来事が起きた。

そう、”崩壊の日” の出来事であった。

「今日は、やけに天気の悪い日だな～」

「本当にそうだなあ」

その日は、雷鳴と悪雲立ち込める日であった。

今日の天気を見て会話をするラクロア騎士団所属のメンバー”妖精射手ジム・スナイパー？”と”格闘家スターク・ジェガン”が呑気にその日の天気の会話をしていた。

その時、2人の前にモンスター”ベア・アッガイ”とモンスター”髑髏兵 ヴダ・ボーン”が多数現れたのだった。

「なつ、何モンスター！！今まで平和なラクロアに何故！？」

「くそー、妖精射手ジム・スナイパー？ここはオイラが奴らの進行を防ぐ、すぐに王宮のラクロア騎士団に知らせるんだ。」

「しつ、しかし

「いいから行け！！」

「わかった。」

妖精射手ジム・スナイパー？は王宮のラクロア騎士団に知らせるべく走つた。

「いくぞ！－モンスターども、ほあつちやああ－！」

そして、格闘家スターク・ジェガソは多数のモンスター軍団に一人で棍棒片手に向かつて行つた。

妖精射手ジム・スナイパー？は事態を知らせる為にラクロア城へ戻つたのだった。

「おーい、大変だあ、モンスターが、モンスターが城の近くに出たんだあ」

ラクロア城内で妖精射手ジム・スナイパー？と出会つたのは、”鍊金術師 エミヤ”だつた。

「なんだつて、モンスターが・・・何故だ？数千年モンスター達は静かに暮らしていたのに」

その時だつた、物凄い音と共に格闘家スターク・ジェガソが城壁を

貫いて現れた。

「大丈夫か！？格闘家スターク・ジェガン？」

城壁をぶち抜き現れた格闘家スターク・ジェGANに駆け寄り安否を確かめる妖精射手ジム・スナイパー？と鍊金術師 エミヤ

「ぐつ・・・やつら強い・・・」

格闘家スターク・ジェGANは仲間達の目の前で絶命した。

「「格闘家スターク・ジェGAN！！」」

そして、城壁の穴からはモンスター軍団が入り込んできた。

「くそ、あいつら許さない！！」

鍊金術師 エミヤは仲間の”死”に怒りを感じモンスター軍団に向かつた。

突如、モンスター群と鍊金術師 エミヤ達の間に魔方陣が現れ中から6枚の黒翼を持つMS族が現れた。

「ふつ、はははは、我が名は”魔王Sフリーダムガンダム”この世界を滅ぼす者」

「く、貴様があ」

鍊金術師 エミヤは得意の鍊金術により両手に剣を出し”魔王Sフリーダムガンダム”へ駆け出した。

魔王Sフリーダムガンダムは、両手に持つ小剣を前に出し”雷”を

放ち鍊金術師 ハミヤを退かせた。

「くつ、くそ」

膝をつき倒れる鍊金術師 ハミヤは、魔王Sフリーダムガンダムの追撃を受けようとしていた。

だが、妖精射手ジム・スナイパー？は援護をする為、矢を放ち魔王^{ストラ}Sフリーダムガンダムの追撃を防いだ。

「大丈夫か？、鍊金術師 ハミヤ」

「ああ、大丈夫だ妖精射手ジム・スナイパー？」

魔王^{ストライク}Sフリーダムガンダムは、自身の周りに無数の魔方陣を開き其処から光の柱が放たれた。

「「なつ、うつ・・・うわー！！」

無数の光の柱は、無常にも”妖精射手ジム・スナイパー？”と”鍊金術師 ハミヤ”を包み込み消滅させた。

「ふふふ、はははは、弱い弱すぎるぞ。ははははあ」

声高らかに魔王^{ストライク}Sフリーダムガンダムは城内を進み始めた。

城内王室では、残りのラクロア騎士団のメンバーと王女フェルトが居た。

「王女、ここは我々に任せてお逃げください。」

ラクロア騎士団の騎士団長を務めるガンダム族の末裔である”騎士団長 ガンダム・アストレイブルーフレーム（BF）”が王女への退却を要請した。

「出来ません 私は、この国の王女逃げるわけには行きません。」

王女はこの国の”王女”であるが為退却を拒否した。

騎士団長 ガンダム・アストレイBFとのやり取りをしている時に魔王Sフリーダムガンダムは王室へと現れたのだ。

「ふはははは、この国を貰いに来たぞ。ふはははは

「くつ、現れたな魔王よ。騎士^{ヒーロー}FCガンダム!! 王女を連れて逃げろ。」

騎士団長 ガンダム・アストレイBFは騎士^{ヒーロー}FCガンダムへ王女を強制的に連れて逃げるよう命じて逃げた。

「わかりました 団長、死ないでください。」

「は、離しない騎士^{ヒーロー}FCガンダム私は逃げません。」

騎士ヒュンガムダムは暴れる王女を抱え王室の隠し通路から逃げ出した。

「行くぞ、魔王！！ うおおおおお」

騎士団長 ガンダム・アストレイBFは背中の大剣を振るい上げ、もう一人の騎士エリオは槍を振り魔王ストライクフリーダムガンダムへ向かっていった。

王女を抱え隠し階段を下りて行く騎士ヒュンガムダムは途中の大広間で王女を降ろした。

「王女、すみません」無礼をお許しください。」

「いいえ、私はすみません。意地を張つてしまい」

「騎士ヒュンガムダムよついて来て下さい。魔王を倒す力を貴方に授ける為に儀式の部屋に案内します。」

「力」・・・御意」

そして、王女と騎士ヒュンガムダムは大広間から更に地下数十メートル先にある儀式部屋へと進んでいった。

地下儀式場へ辿り着いた王女と騎士U.C.ガンダムは”ある儀式”の準備を始め巨大な魔方陣の中央へ騎士U.C.ガンダムを配置し王女は儀式を始めた。

魔方陣の光は徐々に光を増し、騎士U.C.ガンダムの体は光に包まれ消え始めていた。

「王女！…こ、これは何の儀式ですか。」

この儀式何か違うそんな疑問が騎士U.C.ガンダムに過ぎり王女フェルトへ質問した。

王女は、その質問に顔を伏せ涙ながらに答えた。

「『めんなさい 騎士U.C.ガンダム。これは”力”を授ける儀式では無いの、これは、これは貴方を他の次元世界へ移動させるための移動魔法の儀式なの！』

「な…！なんだって」

「本当にごめんなさい 貴方がラクロア騎士団に入る数日前に予言で”あなた”や”魔王”についての”予言”が出ていたの、その”予言”にはこう記されていた”魔王降臨する時、白き一角獣の騎士は別なる世界で”大いなる力”を授かり仲間と共に魔王を討ち滅ぼさん。”と貴方はその”白き一角獣の騎士”次元世界で仲間と共に魔王を、魔王を倒して…！」

そして、予言の内容を騎士U.C.ガンダムに伝え終えると騎士U.C.ガンダムは光と共に別次元へと飛ばされた。

「頼みます。”白き一角獣の騎士U.C.ガンダム”」

その後、魔王^{ストライク}Sフリーダムガンダムはラクロア城を崩壊させ、さらに（ニュー）スダ・ドアカワールドも消滅させ自身は別次元へと渡つた。

それが、（ニュー）スダ・ドアカワールドの”崩壊の日”であつた。

一 角獣の騎士 第1章・3（後書き）

少々強引でした。

ご意見・感想お待ちしています。

一角獣の騎士 第1章・4（前書き）

今回、第1章の完結です。

ラクロア城内の寝室で、”過去の自身の記憶の夢”から目を覚ました騎士^{ヨーロッパ}ガンダムは辺りを見渡した。

そこは、自分の知るラクロア城（）と変わつていなかつた。ベットから立ち上がり、魔王討伐の為、また当ても無い旅に出ようと壁に立てかけてある自身の装備品を装備しどアの前に立つた時、扉が開き、ある者が出てきた。

それは、先の魔王との戦いで傷ついた”薔薇騎士ジャステイス”であつた。

「お礼も言わず、出で行くきか？」

「…………すまない。助けてもらつた事には感謝している。」

自身の非礼に謝罪を、尚も城から出て行こうとする騎士^{ヨーロッパ}ガンダムに薔薇騎士ジャステイスは止めた。

「まあ待て、君も事情があるので私達もラクス姫を魔王に連れていかれてしまった。それに、君は”言い伝えに出てくる勇者”なのかも知れない少し話を聞かせてもらえない？」

「…………言い伝え？…………わかつた話を聞こう

「ありがとう、私の名前は薔薇騎士ジャステイス」

「俺は、騎士^{ヨーロッパ}ガンダムだ」

薔薇騎士ジャステイスは右腕を出し握手を求め、騎士^{ヨーロッパ}ガンダム

はそれに答え共に握手を交わした。

ラクロア城の王室では、君主を失つた玉座にラクロア騎士団の面々が居た。

そこで、ヨーロッパ騎士ヒートンガンダムは自身の過去を”もう一つのスダ・ドアカワールドの出来事”について語つた。

”もう一つのスダ・ドアカワールド”この事実にラクロア騎士団の面々は衝撃を受けたのだ。

「ぐう～なんて悲しい話なんや～」

闘士ジム・ストライカーは人情溢れる心で滝の様な涙を流していた。

そんなこんなで、その場に居る全員は自己紹介をし本題である”伝承”について話が始まった。

「では、この世界には伝わる古の伝承について語りつゝたのも”賢

者 ナガト・ユキ”」

「・・・」

薔薇騎士ジャスティスは”賢者ナガト・ユキ”を呼び古の伝承について語らせた。

賢者ナガト・ユキは表情を変えずに坦々と語り出した。

「”異界より来る一角獣の騎士、神より託されし神器を持つ時、勇者となる者の名をガンダム”」

賢者ナガトは坦々と伝承を語り終えた。

薔薇騎士ジャスティスは次の事を話し始めた。

「騎士ユニークーンよ、そこで君には”東の国、オープ国”に向かつて欲しい其処には神器についてのヒントがあるんだ。」

「うむ」

「騎士ユニークーンよ、すまない我々が一緒に同行出来ればいいのだが今は皆傷ついている我々の変わりに魔王討伐と姫の救出をお願いする」

薔薇騎士ジャスティスは騎士ユニークーン^{ユニークーン}ガンダムへ深々と頭を下げた。

「頭を上げてくれ騎士ジャスティス、必ず魔王討伐と姫救出は俺が果してみせる騎士に誓つて、ガンダムと言つ名に誓つて」

「ありがとう、騎士ユニークーン^{ユニークーン}ガンダム」

二人は握手を交わした。

そして、騎士^{ユニアーツ}U.C.ガンダムは薔薇騎士ジヤスティス達ラクロア騎士団の声援を受け、一人”神器”を求め東の国”オープ国”へと向かつた。

場面は変わりどこかの場所かも分からぬ薄暗い部屋には、^{ストライク}フリーダムガンダムが”何かの儀式”の準備を進めていた。

「ふつふふふ、さあ此れから”神・召喚”の儀を始めようぞ、生贊は揃えた後は神器が必要・・・集え！ 我が騎士達よ。」

^{ストライク}魔王Sフリーダムガンダムがそう言つと、暗い部屋から強いオーラを放つ三人が現れ全員魔王の前で膝をつく

「御呼びでしょうか魔王様」

その内中央の騎士が魔王への挨拶をする。

「ははは、来たか我が騎士達よ。」伝説騎士 レジェンド「

「・・・」

「”運命騎士 デスティニー”」

「くつくつ無口だね～」

「笑いが絶えないな”黒騎士 ノワール”」

「「我ら、魔王の剣となり盾となる騎士」」

「では、行け！！ 我が手に神器を」

「「はい」」

そして、三騎士は後ろを向き再び暗い部屋の奥に消えていった。

”東の国 オープ国”に向かう途中の騎士ヒュンダムは、ラクロアとオープの途中にある”エントリーロードオン山脈”を登っていた。

「ふ〜、しかし高い山だな此処は」

山の頂上がまだ見えない事に騎士ヒュンダム疲れていた。だが、山を上つている途中騎士ヒュンダムは複数の気配を感じた。

「んつ！？、其処に隠れているのは誰だ！ 出て来い！！」

そう言つと、岩陰から数十人の山賊が騎士ヒュンダムを囲むように現れた。

その内のスキンヘッドの男が騎士ヒュンダムを脅してきた。

「俺らは、此処を住処にしている山賊”エントリーロードオンの鷹”だ身包み全部置いて立ち去れ！！」

中央の金髪の山賊が前に出てスキンヘッドの山賊が紹介した。

「このお方は、我らがお頭”頭領 ムウ・ラ・フラガ”様よどいだ驚いたか〜」

「（誰だよ？）」

そう、騎士ヒュンダムは別世界の騎士の為、全く誰なのか知らず心の中で”誰？”と考えていた。

だが、此処で足止めされている訳にはいかない為、盾に収納されて

いる剣を抜き戦闘態勢に入った。

「くつ、お頭コイツ俺らと戦う氣ですよ殺つちまつましょい。」

「つむ、では頑張りましょうか」

「「「「「おおおー」「」「」「」」

山賊達は、一斉に騎士じいガンダムに襲い掛かった。

「はあ、せいやー、ヒツヤー」

騎士じいガンダムは襲い掛かつて来た山賊達をかわし疾風の如く気絶させお頭以外の全員はものの3分程で倒されてしまった。

「あへらり、俺以外全滅だよ。強いねー君、じゃ行くぞ」

頭領 ムウ・ラ・フラガは騎士じいガンダムへ飛び掛かり襲い掛かってきたその攻撃は、まさに鷹の様な動きで空中に飛び上がり下に居る騎士じいガンダムへ攻撃し、また空中に飛び上がり襲い掛かる休むことなく攻撃は続き、盾で防御をしている騎士じいガンダムは怒涛の攻撃に膝を落とし始めていた。

「くつ、攻撃に隙がない……だが、こんなとこで、こんなとこで…
・・負けてたまるかあーー！」

言葉に呼応すると同時に騎士じいガンダムは赤い光に包まれ”心獣騎士じいガンダム”へと姿を変えた。

「うおおおお、負けてたまるかー」

心獸騎士^{コニゴーン}ジガンダムは立ち上がり上空より襲い掛かつてくる頭領ムウ・ラ・フラガに自身も飛び上がり剣を突きたて両名は交差した。

「せいやー」

交差した二人の勝敗の行方は・・・

「・・・・・」

数秒の沈黙の後、軍配が上がったのは“心獸騎士^{コニゴーン}ジガンダム”だつた。

頭領 ムウ・ラ・フラガは、その場に倒れ込み氣絶しており心獸騎士^{コニゴーン}ジガンダムは赤い光は静まり騎士^{コニゴーン}ジガンダムへと姿を戻した。そして、その場を後にしエンデミュニオン山脈を登りきり数時間後”東の国 オーブ国”の領土に辿り着いたのだつた。

彼を待ち受けるのは何なのか・・・次回を待て。

一角獣の騎士 第1章・4（後書き）

次回より、”東の国 オープ国”の話です。

東の国オープ 第2章・1（前書き）

第一章、東の国オープ国開始です。

”東の国 オープ国”に辿り着いた騎士^{ヨーハン}ヒュン^ガンダムは城門を潜り抜け城下町に来ていた。

そこは、ラクロア国とは違ひ全てが”和風”

そう、此処はどこかにある国”天宮^{アーヴ} 武者の国”的族がスダ・ドアカワールドに住み着き今の流れとなつた国である。此処の住人達は”洋服”では無く”和服”といつた和風が取り入れられている国なのだ。

城下町を歩きこの国の領主に会わなければいけないのだがこの國の右も左も分からぬ為、道に迷つたと騎士^{ヨーハン}ヒュン^ガンダムは”ある一人の男（MS）”に声をかけられた。

「どうしたんだい、お兄さん？」

その男（MS）は、カラフルな着物を着ており満面の笑みで話しかけてきた。

騎士^{ヨーハン}ヒュン^ガンダムは急に声をかけられ驚いた。

「！？ いや、道迷つてしまつて、すみませんがこの國の領主はどうちらに？」

「おお、それなら俺つちが知つてゐるぜ案内するから着いてきな。」

「ありがとうございます、私は騎士^{ヨーハン}ヒュン^ガンダムと申します。」

「（騎士！？ 珍しいなこの國に騎士なんて）・・・俺つちは”遊

び人の烈士”って言つんだ宜しくな。」

「宜しくお願ひします。（”烈士”？・・・どこか騎士団長に顔が似てゐるな。）」

途中色々な（関係の無い）場所に案内された騎士ヒンガンダムは遊び人の烈士に案内され、この国の領主であるアスハ家の門前まで着いた。

「ここが、領主の城だ。じゃ、俺つちはこの辺で帰るとするわ。」

「感謝する。烈士殿」

「いやいや、じゃあね～」

満面の笑みで手を振る遊び人 烈士に騎士ヒンガンダムも手を振つた。

騎士ヒンガンダムは気を取り直しアスハ家の城門で声を出した。

「すみません。ラクロアから來ました。」

そしてゆっくりと城門は開き中から使用人と思わしき人物が出てきた。

「・・・はい、あなたは？」

「私、ラクロアから來た騎士ヒンガンダムと申します。」

「貴方が騎士ヒンガンダム様ですね。 私、侍女長のマリューと

申します貴方様の事はラクロア騎士団の薔薇騎士 ジャステイス様より伺つております。・・・どうぞこちらへ

「はい」

そして、侍女長 マリューは騎士ヒカルガンダムを城の中へ招き入れ
領主の間へと案内した。

領主の間へと案内された騎士ヒカルガンダムは膝をつき力ガリ姫と対
面していた。

「面を上げい・・・御主が、異世界のラクロアより来た騎士ヒカルガ
ンダムだな。主の事は薔薇騎士 ジャステイスより聞いる。」

「はは」

「本題に入るが”神器”についてだが、此處には”神器”その物は
無い。」

「（一.?）」

”神器は無い。” IJの一言に騎士じ C ガンダムは驚いた。

「 そつ驚くな、 ” 神器 ” が無くとも ” 神器 ” を開く為の ” 鍵 ” はこの私力ガリ・ゴラ・アスハが持つておる。」

「 (ほつ) 」

「 IJ の鍵を、タダでくれてやる事は出来ぬ。」

「 なつ、なに……」

「 そつ、 ” タダ ” ではな、我の ” 望み ” を叶えてくれれば ” 鍵 ” はそちに渡そつ。」

「 ” 望み ” とは何でしょつか? 」

「 つむ、此処より西の森に ” 魔獸 ” が群れをなしてこの国への貿易が出来なくなつて困つておる。その ” 魔獸 ” を退治して欲しいのじや。」

「 西の森の ” 魔獸 ” しかと退治して見せましょ。」

騎士じ C ガンダムは城を後にし、西の森の魔獸討伐に向かつた。

騎士じ C ガンダムが去つた後、一人の黄金武者と姫は騎士じ C ガンダムについて話した。

「 姫、あの者は本当に伝説に出でくる ” 勇者 ” となる者なのでしょうか? 」

「恐ろくな、魔獣討伐は奴の力試しだ魔獣も倒せない者が”伝説の勇者”である筈が無い。 そうだろう、暁武者 大鷲・不知火」

「「はは」」

「うーん、困った。」

騎士ヒンガンドームは、西の森の地図を見ていたがまた道に迷った。地図を見ながら格闘をしていると声を掛けられた。

「よひ、兄ちゃん”また”道に迷つたのかい。」

「おお、これは”烈士”殿そうなんだ西の森に行きたいのだが、まづ町から抜けられなくて困つていたのだ。」

「ははは、なら俺たちが西の森まで案内してやるぜ。」

「感謝する。 烈士殿」

騎士ヒンガンドームは遊び人 烈士と共に西の森に向かい道に迷わずに数時間で西の森の入口まで辿り着いた。

「ひやー兄ちゃん、傲慢姫に言われて西の森に出る”魔獣”討伐をするのかい。」

「ああ、それを退治しなければ大事な物が手に入らないのだ。」

「ふうん、なら俺たちも魔獣退治お手伝いさせてもらひつぜ。」

遊び人 烈士は腕を頭の後ろで組みながら笑顔で魔獣討伐の手伝いを志願してきた。

だが、魔獣討伐はあまりにも危険な為、騎士ヨーロンヒンガンダムその志願を受けるわけには行かなかつた。

「危険だ!! 相手は”魔獣”喰われてしまふかも知れないのだぞ。」

「大丈夫、大丈夫、俺ちはそこら辺の遊び人とは違うんだぜ。それに兄ちゃん方向音痴だからな森で迷子になつて魔獣と戦う前に死んだらどうするんだい?」

「うつ・・・・」

騎士ヨーロンヒンガンダムは自身の方向音痴に何も言えなかつた。

「はあー、仕方が無い。 ただし魔獣が出てきたら真っ先に逃げてください。」

溜息をつき遊び人 烈士の同行を許可する騎士ヨーロンヒンガンダムだった。

二人は、森の中に進み歩いていたが一行に魔獣の魔の字も発見できなかつた。

「何も居ないな、生き物の気配すら無い。」

騎士ヒコガンドームは静か過ぎる森に不気味さを感じていた。
だが、遊び人 烈士は微かな音を聞き逃さなかつた。

「！？ 兄ちゃん、どうやら”出た”みたいだぜ。」

「ん？」

烈士が後ろを見て”魔獣”が”出た”と言つと騎士ヒコガンドームも振り返ると遠くから黒い一つ田の犬が群れをなして迫つてきた。

「「！」

騎士ヒコガンドームと遊び人 烈士は走り出した。

「どうひやー、わわわわわ、おいおい、なんだアレは！？ 魔獣は一匹じゃないのか？」

騎士ヒコガンドームは驚いていた。

「兄ちゃん、アレは”魔獸”じゃない。ありやー”魔犬バクウ”だ魔獸の手下の魔犬、あいつらは群れで餌をとり魔獸に献上するんだ。」

必死に走りながら遊び人 烈士は解説した。

「ならば、烈士殿は逃げる此処は俺が倒す。こい犬共！！」

烈士が逃げるのを見届けると騎士^{ヨーロン}ヒ^{ヨーロン}ガンドムは体制を変え盾に収納されている剣を抜き戦闘態勢を取つた。

「はあー、せい、せい」

無数に襲い掛かつてくる魔犬バクウの群れを騎士^{ヨーロン}ヒ^{ヨーロン}ガンドムは跳び上がり剣で切り払い牙を向ける魔犬バクウには盾で防ぎ剣で払い退けた。

騎士^{ヨーロン}ヒ^{ヨーロン}ガンドムは森と言う地形を生かし、木々を飛び移り魔犬を数十体は倒したが一人対複数の敵時間が掛かるにつれて窮地に立たされていた。

「くつ、数が多くすぎる。やあー、はつ」

圧倒的な魔犬の数に苦戦を強いられていた時、魔犬達が突然襲い掛かつてこなくなつた。

「（んつ、なんだ魔犬達が急に大人しくなつた。んつ！）」

森の奥深くから、異様な^{ブレッシャー}圧迫感を感じた。

森の奥深くより大きな影が木々を倒しながら歩いてくるが見えたその影は、段々とハッキリと見え一匹の獣が現れた。

まさに、”魔獸”と言う名に相応しい”オレンジ色の一つ目の獣”が騎士ヒンダムの前に現れた。

「デカイ！、これが、これが”魔獸”なのか」

「グオオオオオオ」

”魔獸ラゴウ”は一度吼えると、周りの木々はざわめき大地は揺れた。

「くつ、まずいこんな時に”魔獸”と”魔犬”を相手にしなければいけない。」

騎士ヒンダムが考へている時、突然魔獸の顔面に枝が飛んで来た騎士ヒンダムは上を見上げると其処には・・・

「加勢するかい？、兄ちゃん」

「烈士殿！？ なぜ戻つて來た？」

木の枝の上に立つて居たのは”遊び人の烈士”だつた。

「なあに、ちよいと俺つちも其処の”魔獸ラゴウ”が町のみんなを苦しめてるんで退治しようと思つてな。」

「なつ、無理だ。 貴方がどうやって」

「へへん、”遊び人”とは”仮の姿”本当は・・・」

”遊び人 烈士”は、枝から飛び降りた。

「鎧召喚！！」

”遊び人 烈士”は光に包まれると、”紅き鎧”を身に纏つた。

「俺は、武者、”紅武者 烈士丸”！！」

”遊び人 烈士”は紅き武者鎧を身に纏つた”紅武者 烈士丸”が魔獣ラゴウと騎士ロボガンダムの前に現れた。

”紅武者 烈士丸”の活躍は如何に？・・・次回を待て

東の国オープ 第2章・1（後書き）

え、今回出でくるモンスター”魔獣ラゴウ”と”魔犬バクウ”は烈火竜先生よりアイデアを頂戴し書きました。

誠に感謝でござります。m(—_—)m

ご意見、ご感想お待ちしております！！

東の国オープ 第2章・2（前書き）

魔獸との決着編です。

どうぞ、どうぞ

”遊び人 烈士”改め”紅武者 烈士丸”が騎士ヒューランドマルガンダムと魔獸達の前に現れ対峙した。

紅武者 烈士丸は、腰に刺さっている刀（菊一文字）に手を添え静かに腰を落とし目を閉じ居合いの構えを取った。

「・・・・・」

周りの木々はざわめき、数匹の魔犬 バクウは我慢出来ずに紅武者烈士丸に襲い掛かってきた。

「グルッ・・・グワアアア」

「・・・・・斬！！」

紅武者 烈士丸は、目を開け手に添えていた刀を抜き抜刀した。数匹の魔犬 バクウとすれ違い魔犬バクウ達は、その体を二つに裂かれ絶命した。

『どんなもんだい！』と言わんばかりに鼻の辺りを右手の人差し指で擦りながら武者 烈士丸は騎士ヒューランドマルガンダムの方を見てきた。

「す、すごい」

その光景に騎士ヒューランドマルガンダムは驚いた一瞬で数匹もの魔犬を葬り去つたのだから。

だが、魔獸や魔犬達はそんな事では怯まず、一斉に魔犬達が襲い掛けってきた。

先ほどの光景の余韻に浸る暇も無く、騎士じこ ガンダムと武者 烈士丸は戦闘態勢を取つた。

「行くぞ！！ 騎士じこ ガンダム殿」

「心得た！！」

騎士じこ ガンダムと紅武者 烈士丸は一手に別れ魔犬 バクウを撹乱し全ての魔犬達を倒していった。

「「せい、やああ、てい」」

全ての魔犬 バクウが倒され、魔獸 ラゴウは騎士じこ ガンダムへ雄叫びを上げ木々を薙ぎ倒しながら突っ込んで来た。

「グオオオオオオオ」

「くつ、うわあああ」

騎士じこ ガンダムは吹き飛ばされた。

「騎士じこ ガンダム殿！！」

魔獸 ラゴウは、続いて紅武者 烈士丸へ雄叫びを上げその巨体から前の前足を振り上げた。

「よつと、はあー」

紅武者 烈士丸は魔獸 ラゴウの攻撃を飛び上がり回避し魔獸 ラゴウの額の角に刀で攻撃をしたが弾き返された。

空中では体勢を変えられず、魔獸は口元の左右に着いている長い牙で攻撃を行つた。

「くつ……」

紅武者 烈士丸は、刀で防御体勢を取りその攻撃を防いだが数メートル吹き飛ばされ倒れた。

だが、何故だが魔獸 ラ'ゴウの攻撃は来ず暫く沈黙が続いたのだ。

「グッ、グゥウウ」

突然、魔獸が苦しみ始めたのだ。

「…？」

紅武者 烈士丸は、突然の出来事に疑問を浮かべた。
だが、答えは直ぐに分かつた何故ならば・・・

「大丈夫か？ 烈士丸殿」

「おお、騎士じー^{ヨーロン}ガンダム殿！！ 『ご無事であつたか』

魔獸の背中の上から突然騎士じー^{ヨーロン}ガンダムが出てきたのだ。
先ほど吹き飛ばされた騎士じー^{ヨーロン}ガンダムは魔獸の背中に着地していつたのだ、そして剣を魔獸の背中へと突きたて刺し魔獸を攻撃していつたのだ。

そう、魔獸が突然苦しみ出したのは騎士じー^{ヨーロン}ガンダムが攻撃をしていた事によるものだつたのだ。

魔獸は苦しみ出し暴れ始めた、まるで暴れ牛に乗るかの様に騎士じー^{ヨーロン}

Cガンダムは剣を突き刺しながら振り落とされないよう捕まつていた。

「うお、お、お、お、お」

騎士U Cガンダムは暴れる魔獸に捕まつてはいるがそろそろ限界であつた。

だが、紅武者 烈士丸は立ち上がり騎士U Cガンダムへある一言を言つた。

「騎士U Cガンダム殿、もう少し耐えられよ今すつ“い”一擊を”奴”へ加える」

「い、い、い、心得た」

紅武者 烈士丸は叫ぶと、黄金の光に包まれ新たな姿が現れた。

「天・来・変・化”」

「剛力武装、剛力武者 烈士丸！」

両肩の鎧が盛り上がつた姿の烈士丸が現れたのだ。

「行くぜ！ 魔獣狩りだああ」

剛力武者 烈士丸は、腰の刀を抜き天にかざし再び叫んだ。

「”極大”！ 菊 一文字！』

そう叫ぶと刀（菊一文字）は150mの巨大な刀になり、それを剛力武者 烈士丸は肩の鎧が更に盛り上がり両手で巨大な刀を持つと一気に振り落とした。

「避けろよ兄ちゃん、”天・動・奥・義” 極大・斜不斗袈裟斬りいいい！！！」

「なんと、無謀なああ」

騎士（ユーローン）ガンダムは突然振り落とされた巨大な刀に驚き、慌てて魔獸 ラゴウから飛び降りた。

飛び降りたと同時に、巨大な刀は魔獸 ラゴウの体を真つ二つに引き裂き魔獸は光の柱となつた。

「ふうう、いつちょあがり」

紅武者 烈士丸へ戻り元のサイズの刀を鞘に収め腕で汗を拭いていた。

「危ないではないか！！ 烈士丸殿！！」

木の枝や、木の葉を体中に着けた騎士（ユーローン）ガンダムが出てきて剛力武者 烈士丸へ抗議をしていた。

「へへ、すまねえ、すまねえ、まあ無事だつたんだから良いじゃないか」

「はあ～」

騎士^{ユニヨン}U.C.ガンダムは、うな垂れ武者 烈土丸態度に呆れてモノも言えなかつた。

魔獸 ラゴウを退治した一人はカガリ姫へ報告をする為オープ国へ戻つた。

だが・・・

「「ん!-?」」

二人はある光景を目にしてた。
それは・・・

”オープ国が燃えている光景” だつた。

いつたい”オープ国”に何が起こつたのか?・・・次回を待て

東の国オープ 第2章・2（後書き）

いつたい！？オープ國に何が起こったのか。

ご意見、ご感想お待ちしております。

東の国オープ 第2章・3（前書き）

申し訳ござりません。

仕事が忙しく、久々の更新です。

魔獸討伐が終わり、一路オープ国へ帰路していた騎士ヒカル^{ヒカル}ガンダムと紅武者 烈士丸だがオープ国が燃えている光景を見て走った。オープ国へ入り周りの民家が、燃えオープ国の住民が逃げ惑い地面には人々が倒れていた。

紅武者 烈士丸はまだ息のある住民の一人に駆け寄った。

「大丈夫か！ 何があつたんだ？」

「・・・っ、突然、黒い、黒い雲に覆われて雷と共に、ヤ、ヤツラ
ガ・・・」

「おい！ しつかりしる。ヤツラ?とは一体誰だ。」

そう言い残し、住民の一人は息を引き取つた。

「くそ・・・一体何があつたんだ!..」

周りの家が燃えている中、複数の黒い影が騎士ヒカル^{ヒカル}ガンダムと紅武者 烈士丸の前に現れた。

「・・・」

複数の影は、やがてハツキリと見えてきた。

それは・・・滅竜魔王^{ストライク}フリーダムガンダムの配下であるMS族やモンスター達だった。

複数の”兵隊・ジン”と兵士達を束ねる”兵隊長・シグー”と3体の”ゴーレム・ザウードレム”が騎士^{ヨーハン}ヒカル^{ガンドム}と紅武者 烈士丸の目の前に現れたのだ。

「お前達が、この国をこんなにしたのか！？」

紅武者 烈士丸は怒りを露にし田の前の敵に怒り発したが兵隊やモニスター達は答えず無言で立っていた。

「そうです。 神器の鍵を手に入れる為、魔王の命により我々がこの町を焼き払いました。」

突如声が聞こえ騎士^{ヨーハン}ヒカル^{ガンドム}と紅武者 烈士丸は声のした場所を見ると兵隊やモンスター達は左右に別れは真ん中通路を作ると、”背中に10本の槍を背中に背負つた”1人のMS族が中央を歩きながら現れた。

「お前に、お目にかかります騎士^{ヨーハン}ヒカル^{ガンドム}。 私は、”騎士レジ^{ヨーハン}ド”貴方の命と神器の鍵を頂戴に来ました。」

「おのれ、魔王の配下の騎士か！？」

「ふふふ、まあ殺してしまえ。 行け！－！ 兵隊達よ！－！」

「くつ、行くぞ、烈士丸殿！－！」

「おおよーー！」

兵隊達やモンスターは”伝説騎士 レジエンド”の掛け声と共に騎士UICガンダムと紅武者 烈士丸に襲い掛かつてきた。

「さあ、私は”鍵”の回収に行きますか。」

伝説騎士 レジエンドは、そつそつと黒煙を上げ姿を消した。

「はあああ、せい、はつ、やああ」

騎士UICガンダムは、剣を持ち兵隊 ジンへと斬りかかつた。

兵隊 ジンは、斬りつけられ消えていった。

「じおりやー」

紅武者 烈士丸も刀を持ち兵隊 ジンへと斬りかかり疾風の如く駆け抜け数体もの兵隊 ジンを葬り去つて行つた。

だが、兵隊達の数が多く尚且つ大型のゴーレムまでもいる為、数があまり減らなかつた。

「くそ、数が多くすぎる。」

「諦めるな！！ 烈士丸殿、コイツ等を倒さない限りこの国に平和は無い！！」

武者 烈士丸は兵隊達の多さに少し弱音を吐いたが騎士用機^{ヨーナー}ガンダムはそんな弱音を切り捨て渴を入れた。そんな時、一人の影が騎士用機^{ヨーナー}ガンダム、紅武者 烈士丸の前に飛び出した。

「お前達は！？・・・」

紅武者 烈士丸は一人の影に覚えがあった。それは・・・

「我ら、カガリ姫の守り刀・・・」

「 暁武者 大鷲」

「同じく、”不知火”」

「我らが助太刀いたす！！」

オープ^{ヨーナー}国、力ガリ姫の守り刀である二人の武者”大鷲””不知火”が騎士用機^{ヨーナー}ガンダム、紅武者 烈士丸の援軍として駆けつけた。

”暁武者 不知火”が騎士用機^{ヨーナー}ガンダムへ”ある事”を進言する。

「騎士用機^{ヨーナー}ガンダム殿、此処は我らに任せて御主は先程の”魔王の配下の騎士”を追うのだ。城に居る姫を頼む！」

「…？・・・わかつた」

伝説騎士 レジヨンド¹ を討伐する為、その場を立ち去る騎士^{ユニア} C² ガンダムだつた。

紅武者 烈士丸は、それを見届け刀を振り上げた。

「よつしゃ、いっちょ行くかー」

「「おひ」」

紅武者 烈士丸、暁武者 大鷲、暁武者 不知火は、滅竜魔王^{ストライク} Sフリーダムガンダムの配下であるMS族やモンスター達へ向かつた。

まずは、”暁武者 大鷲”は襲いかかる複数の兵隊・ジンへ自身達の武器である薙刀を回転させ竜巻を起こし薙ぎ払つた。

「つおおおお、”奥義・暁の牙”」

”暁武者 不知火”は、背中に背負つた黄金の刃を飛ばしゴーレム・ザウードレム翻弄した。

「”奥義・黄金の燕”」

そして、武者 烈士丸は兵隊長・シグーと刀と剣を交差させ火花を散らしながら戦つた。

「せい、どりやああ」

「・・・」

兵士達は、まるで屍のように感情を表さず黙々と戦つていた。だが、最初は武者 烈士丸達は優勢に戦つていたが兵隊達やモンスター達は数が多く徐々に劣勢に立たされていた。

「うわああ」

ゴーレム・ザウードレムの巨大な拳が暁武者 不知火を捕らえ、不知火を吹き飛ばし民家へと叩き付けた。

「不知火！！ くつ」

叩き付けられた不知火を心配する暁武者 大鷲だが自身も数の多い兵士・ジンに押されていた。

暁武者 大鷲は、後ろに下がり紅武者 烈士丸と背中合わせになつた。

「くつ、どうする？ 烈士丸殿」

「・・・（汗）」

一方、魔王の配下である”伝説騎士 レジェンド”を追う騎士^{ヒーロー}たち
ガンダムは行く手を阻む兵士・ジンやゴーレム・ザウードレムを、
かわしながらカガリ姫の元へと向かつた。

「はつ、ふん、とう」

数体の兵士・ジンと兵隊長・シグーを倒し山の様にそびえ立つゴーレム・ザウードレムを飛び越え前、前と進んだが数により思つた以上に進めなかつた。

「前に進めない、このままでは間に合わない くそお 」

その時、騎士^{ヒーロー}たち ガンダムは感情の昂りによつて赤い光に包まれ

心獣騎士^{ヒーロー}たち ガンダム”へと変わつた。

心獣騎士^{ヒーロー}たち ガンダムは凄まじい速さで駆け抜け、赤き光によつて兵士達、モンスターは消滅していつた。

そして、光の速度で駆け抜けた心獣騎士^{ヒーロー}たち ガンダムはカガリ姫の居る城に着き大広間にて魔王の配下である”伝説騎士 レジェンド”を

見つけた。

「見つけたぞ！悪しき者よ

「ほお、意外に早かつたですね此処に辿り着くのが、良いでしょ？少し遊んであげましょ？」

伝説騎士 レジエンドは背中から2本のスピアを引き抜き連結させ心獣騎士ヒューガンダムの前に突き出し戦闘態勢に入った。

「行くぞ！！ 魔王の配下の騎士」

いよいよ、開始される魔王配下の騎士、”伝説騎士 レジエンド”との対決

そして、兵士、モンスター達と戦つ紅武者 烈士丸達の行方は・・・

”神器の鍵”を巡る最終決戦の火蓋がきつて落とされた。

第2章最終章・・・次回を待て

東の国オープ 第2章・3（後書き）

今回、烈火竜様のアイディアを参考にしモンスターを書きました。
本当にありがとうございます。

次回、第2章最終章です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3411q/>

真SDガンダム外伝 『一角獣の騎士』

2011年5月4日10時20分発行